

舞台芸術ワーキンググループ論点（案）

1. 舞台芸術の振興方策について

(論点例)

- 頂点の伸張と裾野を拡大するための支援の方策とそれぞれの役割について
- 支援にかかる目標をどう設定し、その成果の測定と評価をどのように実施するのか。
- 効率的・効果的な支援手法はどのようなものか。
- 次代を担う子どもたちの文化芸術体験の機会を一層拡大・充実するためにはどのような取り組みが必要か。
- 地方独自の取組について促す仕組みをどうするのか。

論点例に対する御意見

- ◎設問に対する愚見は、主に伝統芸能に関わるものであることとお許し願いたい。
- ◎舞台芸術の振興に関わる施策が目指すべきは、今更言うまでもなく
 - (1) 実演家の育成
 - (2) 観客の育成の二点に尽きる。そして、観客の育成が即ち実演家の育成に発展していくことになる。
- ◎(1)は、本邦に普く存在する関連芸術団体を活用するのが効率的、かつ効果的である。
- ◎(2)は、伝統芸能を守り伝えていくために不可欠である。自宅に和室（畳の部屋）がないという子供が急速に増加しているという現実を考えれば、その対策は急務である。
- ◎伝統芸能に携わる人材の養成は、実は、その底辺にこそあるのだという認識が必要である。「演じる者」は「観る者」の中からしか生まれない。「観る者」の養成は20年、30年という長いスパンで考えなければ達し得ない。そのためには、学校教育の現場において行うのが最も有効である。総合学習などという中途半端なものでは到底なし得ない。
- ◎このような事業は、芸能団体や個人の努力で達成されることではない。国の教育目標として計画され、実践されていかなければならないと考える。

2. 支援の在り方について

(論点例)

- 音楽（オペラ、オーケストラなど）、舞踊（日本舞踊、バレエ、コンテンポラリーダンスなど）、演劇、大衆芸能など分野の特性に対応した支援をどのように考えるのか。
- オペラ、バレエなど長い時間稽古を経て公演を迎える「先行投資型」、オーケストラ、大衆芸能など完成された作品を習得した演者が公演する「人材活用型」など公演制作形態に対応した支援をどのように考えるのか。
- 芸術団体の職員が自らマネジメントするなど企画能力の高い団体を育成していくことをどのように考えるのか。
- 個々の公演支援とは別に、従来のいわゆる団体支援とは異なり、団体の定期公演など年間の活動を総合的に支援する特別な支援の枠組をどのように考えるのか。その際、芸術創造活動特別推進事業、国際芸術交流支援事業、人材育成支援事業をどのようにマッチングしていくのか。
- 民間資金を一層活用するマッチング・グラントのような助成の仕組みの導入をどのように図るか。
- 舞台芸術の公演に対する助成をより効果的に実施するための体制についてどのように考えるか（例えば、プログラムオフィサーを置いたアーツカウンシルのような組織を設けることについてどのように考えるか）。

論点例に対する御意見

- ◎音楽、舞踊、演劇、大衆芸能などの舞台芸術に関わる人材育成は、長いスパンを必要とするが、それに対する国家的支援は、
 - (1) プロフェッショナル養成段階に対する支援
 - (2) 公演に対する支援に分けられるであろう。これは、すべての舞台芸術に共通することであり、同時に、上記論点例の「先行投資型」「人材活用型」もまた、すべての舞台芸術に共通することである。
- ◎芸術創造活動特別推進事業、人材育成支援事業等は妥当な施策であり、金額的な面を除けば異議はない。当法人においては、これらの支援がなければ、為し得ない事業もある。
- ◎(2) について述べる。
 1. 支援の有無並びに支援額の決定（内示でも）を早めることはできないかということである。国家予算の成立を待たなければならないことは重々承知しているが、前段で述べた通り、その結果によっては事業の中止も考えられるからである。
 2. 会場（劇場）の確保（予約）の問題がある。上の 1. を待つことなく、会場を予約しなければならないという現実がある。会場の予約金は返還してくれない。
 3. 以上の観点から、少なくとも公共的な会場（国立劇場等）の使用において、国と当該会場との連携体制を作ることは不可能だろうか。（つづく）

(つづいて)

- ◎企画能力の高い団体オフィスマネジャーの育成、公演におけるプログラムオフィサーの育成は、すべて経費の捻出をどうするかにかかっている。どの法人でも次世代オフィサー養成の必要性は痛感しているもと考えるが、力が及ばないということが現実ではないだろうか。
- ◎そういう意味では、アーツカウンシルのような存在は大いに手助けになるものと考えますが、実現、その活用には相当の困難が予測されるので、各関連団体の実務者を交えた議論が必要と考える。

3. 芸術拠点の形成について

(論点例)

- 地域により優れた舞台芸術に触れる機会に著しい格差があり、この格差を少なくするためには、自ら創造・発信できる劇場・音楽堂が各地域にあることが望まれるが、どのような施策が必要か。
- 地域の劇場・音楽堂が優れた舞台芸術の創造・発信が行えるようになるためには、芸術監督やアートマネジメント人材、専門的知識を有した舞台技術者等、優れた人材が必要不可欠であるが、人材の育成や配置等について、国がどのような支援を行っていくべきか。
- 劇場・音楽堂について法的根拠を設け、一定の要件を満たす劇場・音楽堂に対して公的な支援を実施するような仕組みの必要性についてどのように考えるか。
- 劇場・音楽堂が地域住民や芸術家の意向を反映したり、企業等の支援を受けながら運営の充実に資するような支援はどのように行うべきか。

論点例に対する御意見

- ◎劇場・音楽堂は、現段階においては充分と考える。
- ◎劇場・音楽堂を「音楽、舞踊、演劇、大衆芸能などの舞台芸術」を鑑賞し体験する「場」と考えたい。
- ◎であるならば、いわゆるハコモノの新設は不要である。村の公民館や学校の体育館（講堂）で足りる。「場」は何であれ、中身が問題である。
- ◎従って、中身を充実させる施策は必要である。
- ◎例えば、○△町に専門的知識を有する専門家を配置することは困難であり、またその必要もない。例えば、県に「芸術監督室」のような組織を設け、そこで全県下市町村の芸術的要望・その実施を計ることも考えられるであろう。（芸術監督室には国庫補助も考えていい）
- ◎公演母体が自前の照明・音響等の舞台技術者を有しない場合には、芸術監督室から派遣することも考えられる。

4. 人材の育成について

(論点例)

- それぞれの分野における人材育成に対する効果的な支援策について
- 新進芸術家海外研修制度の研修修了者の成果の検証方法及び今後の研修制度はどのようにあるべきか。
- 新進芸術家海外研修制度の研修修了生など、新進若手芸術家の活躍の機会をどのように確保するか。
- 新国立劇場の各研修所を今後どのように充実していくべきか。
- それぞれの分野の人材育成において、学校教育からの継続性をどのように確保するのか。

論点例に対する御意見

- ◎海外研修制度については、特に言うべきものを持っていない。
- ◎論点から逸れるが、新進若手芸術家の活躍の機会について述べれば、日本舞踊協会では、文化庁・人材育成支援事業の支援を得て、毎年1月、「各流派合同新春舞踊大会」というコンクール形式の公演（4日間／8公演）を開催しており、それなりの成果を上げていると自負しているが、その支援を得てもなお、当法人並びに出演する若手舞踊家の負担は一般の想像以上に過重である。対策が必要である。
- ◎学校教育との関連については、[設問 1.] と重複するので、ここでは省略する。

5. 海外への発信について

(論点例)

- 効果的な舞台芸術の海外発信はどのようにしたらよいか。
- 計画的でレベルの高い公演を海外で行うための支援方策とは。
- 芸術団体間の国際的相互交流を推進するためにはどのような支援策が有効か。

論点例に対する御意見

◎舞台芸術の海外発信（公演）は重要であると考えている。

◎問題はカネとヒトである。

昨年(2009)、当法人の某支部が、某県の要請で韓国に招聘されて公演を行ったが、出演者の持ち出しを抑えることは出来なかった。非常に無念なことであった。

6. その他

その他、舞台芸術の振興に関して、議論すべき論点がございましたら、以下に御記入ください。

その他御意見

◎「ナマ」のものを観る、聴くということが、人間の発達、生活において如何に効果があり、重要であるかは言うまでもない。

◎そういう機会を与えるための努力を、関連団体も国家も怠ってはならない。